

## 総括

三谷博

今日はこの場にお招きいただきまして、ありがとうございました。オーガナイズしてくださった先生方、それから発表者、討論者の先生方、どうもありがとうございました。実を言うと、来る前はあまり期待していなかったのですが、とても面白くて、来てよかったなと思いました。私はいまご紹介にありましたが、本来は維新史の専門家で、実はこの正月にもう歴史認識問題はやめると宣言してしまったのですが、これはもう到底やめられないなと覚悟しました。

これから五つほどの点について申し上げたいと思います。まず今の東アジアでの歴史対話の現状とその問題ということです。これは、各先生方が強調なさったように、政治家レベルの仕事と、それから歴史家、歴史教育者のレベルの仕事、その役割がどうも違うようだということがあります。そして特に東アジアの場合は、民間での対話というものが非常に重要な役割を果たしてきて、政界というのはどちらかというとトラブルをつくり出す方に貢献してきたという歴史があります。具体的に申しますと、日韓・日中でご存じのように、政府レベルの歴史対話・歴史共同研究が行われましたけれども、これは一応報告書は出しましたが、必ずしも成功とは言えませんでした。なぜならば、それに関わった当事者がいづれも相互不信感を持ちだして、もう一度やりたい、続けたいとか、あるいはそこに親しい友人をつくるということが起きなかったからです。これは民間での対話と全く逆の結果でした。ですから、政府レベルの、政府が関与した共同研究というものには、しばらくの間は期待が持てないというのが現実です。

それから、その相互不信感をもたらした原因の一つは、この東アジアには様々な政治体制をもった国があって、政府と独立した市民社会を持たない社会があるということがあります。日中の共同研究の報告書は、先日全体が公表されましたが、第二次大戦の戦後部分については、原稿が用意されたにもかかわらず発表されませんでした。これは主に中国側の事情で、これを出したら中国の国内世論が反発するという理由だったそうですが、どうしてそんなことになるのか、これはおそらく日本や韓国の人々は理解できないと思います。つまり、はっきり言えば日本側の場合、日本が平和を追求する国になって六十年間も一回も戦争していない、ずいぶん国際協力のために努力してきたという部分が日中間の歴史の中から隠されてしまったということがあるわけです。日本側の一生懸命、共同研究に携わった人々はそれを大変に遺憾に思っていると聞きました。歴史家相互の対話は非常に上手くいったんだそうです。ところが、それが中国の国内に還元できない状態があるという問題があります。これは中国の政治体制に由来するものです。中国の知識人やビジネスマンたちは、国際協調の重要性は非常によくわかっているのですが、それを中学・高校での歴史教育に還元できないという枠がぎっちりハマっていて、これは当分解消しないと思います。ですから、政府レベルの対話に大きな期待を持つことはできないと私は申し上げます。これが現実です。

次には国家を超えた、境界を超えた歴史対話の国内還元という問題について、国内レベ

ルと国家間関係のレベルの二つに分けてまず申し上げます。楊先生はたとえば韓国では東アジア地域史という科目がつくられて、その教科書が編集されることになったとおっしゃいましたが、現在、日本でもそのような動きが起きております。日本学術会議というところのメンバーに私はなっております、そのなかに地理と歴史の教育を再編成するという企てがあって、そのなかで私は近現代史に絞って世界史と日本史を融合した科目をつくってはどうかという提案をいたしました。先月末、詳しい提案をしたんですね。私は前近代史をやっている人たちから強烈な反発を受けるんじゃないかと大分、危惧していたんですけど、意外に反発はなくて、それも良い案かも知れないという反応でした。日本学術会議というのは決定権のない団体でして、文部科学省の政策に反映されるとはまず期待しない方がいいんですけど、でも十年ほど後に学習指導要領を改訂するときには、参考とされる可能性はゼロではありません。

というわけで、近現代史に絞るということによって、日本と近隣の諸国との関係に特に注意を払う教科書をつくる、そういう科目を設けて教科書をつくろうという動きはすでに始まっております。ただし、そうした日本国内でのカリキュラム改正という問題は大きくて、これを為し遂げるっていうのは大変難しいでしょう。ですから、むしろ易しい、すぐ出来るのは、やはり柴先生がご紹介下さったような副教材をつくる、それによってあらかじめ前提条件をつくっておくことだろうと思われまいます。これは、中国の場合でも、学校で実際に使うかどうかは別にして、そういうことは不可能ではないだろうと思えます。次に、国際レベルの問題ですけれども、先生方何人かからご紹介がありましたように、二国間での対話、それから多国間での対話、さらにリージョナルなレベルでの対話というふうな色々なタイプが考えられます。今日まで二国間関係が中心になってきましたが、これは通訳の容易さもあって、続ける必要があります。しかし、それだけでは不十分で、多国間関係も非常に重要だろうということが段々わかってまいりました。第一に、この域内と申しますか、東アジアの日本、韓国、北朝鮮、中国、台湾、あるいはベトナム等を含めてもいいかも知れませんが、東アジアの内部の国々のあいだでの対話というものを多角的におこなう必要があります。二国間だけでは見えないことがわかってくるし、同時に二国間でははまってしまう落とし穴を回避することもできます。こういう場では、国々のあいだの、国民のあいだの差異とか対立とかが露骨に現れてくると思いますが、しかし多角的であることによって、それぞれの当事者が反省をするというチャンスも増えてまいります。次に、楊先生がとくに東アジアで重要なのではないかと指摘なさった、第三者を加えてはどうか。これは矢口先生もおっしゃいました。第三者を交えて対話をするとか、あるいは第三者の設けた場で対話するということは、やはり同様に重要なことだと思います。私の知る限り、この第三者で非常に有力な仕事をしているのがスタンフォード大学でありまして、三年前に東アジアの歴史教科書を比較する会議を開きました。日本・韓国・中国・台湾・アメリカの最も売れている教科書を英語に翻訳する。扱う時代は1931年満州事変から1952年サンフランシスコ講和条約までのあいだで、その記事をすべてを英訳して、それを全員が見て、その上で分析評価するのは第三者で、彼らが別の国の教科書を分析する。そしてまた、自らが体験談を語るというパートもあって、私は日本の中学と高校の教科書も書いていますが、その話を書きました。そういうわけで、第三者が東アジアに介入することによって、すべての当事国を公平に観察することが可能になったわけです。その

結果がどうかということは、ぜひ来年出版されましたら読んで頂きたいと思います。大きな成果があったと思います。

それから、三番目に内容面の問題に触れます。これは南先生が取り上げられた慰安婦問題をはじめとする、非常に強い情動喚起力をもった問題をどう扱うかという問題です。南先生がおっしゃったように、日本と韓国の教科書では記述の量も違えば、パースペクティブも違う。これは事実ですし、いずれが正しいかという問題ではありません。じゃあその先どうするのかという問題なのですが、いくつか論点があります。第一は、たとえば慰安婦の方々の証言をどう扱うかという問題。職業的な歴史家というものは、文字にされた史料しか信用しないという癖がありまして、本人の証言というものはそのままでは信用できません。これは初歩的なルール、世界的なルールです。じゃあ、文字で書かれた証拠がないからご本人の証言は信用できないのかというと、そんなことはないはずですが、どこが信用できて、どこが信用できないのかわからない。そういうときに、われわれはどういうふうにしてその証言を受け止めたら良いのかという問題があって、これは日本の沖縄での集団自決の事件についてもやはり同じように問題になりました。その場合すべきことはまず、ただ聞く、そしてこの人はこのように証言しているということ記録し、それを人々に伝える、次の世代にまで伝える、ということでしょう。中身が正しいかどうかを問うより、このようにこの人は苦しんだのだということ伝える方が、事実起きたことを確定するよりは先立つべきだと申し上げておきます。

それから、歴史教育という場面では世代間の問題、その差異を考える必要があります。これは意外に歴史対話のなかでは語られない問題なのですが、たとえば日本が隣国に対して加害行為を働いたのは二十世紀の前半です。戦後はそういうことはしておりません。そうすると私を含めて戦後に生まれた日本人は、なぜ自分がやってないことに責任を取られるのかわからないというのが率直な考えだろうと思います。そういう立場にある今の日本の人口の大多数は、このような問題を提出されたときにまず無視しようとし、逃げようとし、それではいけないということ、どうしたら説得できるのかということ、真剣に考えなくてはなりません。と同時に、被害者の子孫たちも、どうして自分でやってない人達を指弾し、批判する権利があるのかということ、真面目に考えなくてはならないと思います。

次に教育の方法の問題ですが、これは慰安婦問題とか南京大虐殺というふうな問題をまず取り上げると、みんな人は眼を背けようとし、その時に、私が主張したいのは大局に目をつけよということ、例えば日本が中国大陸を侵略しました。これは侵略です。というのは、中国軍は一兵たりとも日本の領土に来て戦ったことはないんです。それから、もちろん朝鮮の国民が日本を支配したことはありません。その大局は誰がどう言おうと動かすことはできないと思います。そういう大局を念頭に置いて、そうして初めて、個別のかなり深刻で真正面から見るのが難しい問題をやっと考えられるようになるというのが、ごく普通の人間であろうと思うんですね。そういう教育方法の問題はとても大事です。それから同時に、たとえば教科書でも教室の現場でも、教育の順番が大事です。つまり、最初にまず日本人はこんなにひどいことをしたという授業をやったらみんな子どもたちは逃げてしまいますね。もう先生の言うことを聞かなくなります。現実には現場で起きています。そうじゃなくて、「近代の日本は確かに素晴らしいことをやった」、「自力

で何とか発展を遂げた」、「これは立派なことである」といったように、アイデンティティの基礎をまず与える必要があって、その上で「こういう失敗もしたね」と語りかけるという順序を踏まざるをえません。日本で歴史教育に熱心に携わっている方々はまずダメなところから始めるという癖があるので、これは反省する必要があると私は思います。

それから、今度は具体的な提案です。先ほどの柴先生のご提案は素晴らしいと思います。というのは、これによってさっきの国内レベルと国際レベルが一緒に処理できる。つまり教科書ではなくて、まず史料集をつくる、それを国際対話のなかでつくっていくということ。そこで、とくに柴先生が強調なさったのは、歴史家だけではなくて、歴史教育者が深く関与すべきだという点です。これは双手をあげて賛成いたします。なぜならば、とくに日本の歴史家は史料を集めるのが大好きで、膨大な史料集を出版するのが大好きで、それに自分の命を懸けてるんです。そうすると瑣末なことばかりに目がゆくのですね。そういった人たちに史料集をつくるのを任せるわけにはいかない。やっぱり現場で子どもに何を教えるべきか一生懸命考えてる人に関与してもらわないと、良い史料を選び出すことはできない。考えずに与えることはできないんです。これが現実です。その上で、史料集の中身としては、柴先生がまさにおっしゃったように、多様な考え、互いにおつかり合うような内容を蔵した史料を同時に見せるということが必要です。そんな多様な解釈を体现した史料集を異なる国の子供たちが共有していくという点が大事だろうと思います。これは政府が関与してもできると思いますね。お金を出してくれるというところで止まってくれば。歴史家どうしも、歴史教育者どうしも、ここでは熾烈な対立はしないと思いますね。今までの私の経験で言えば。理想に向かうための非常に良い迂回路だろうと思います。

次にもう一つ、第四に申しあげたいのは、次の世代の歴史家、歴史専門家を育てる必要です。とくに日本史、中国史、韓国史を自国史としてやっている人たちは隣の国に全く関心がないのが普通でして、たとえ関心を持っていても、国際関係史をやっている人以外は博士号をとることはできません。そういうふうにならざるを得ないんです。そうすると、大学院で博士号をとってそのまま放っておくと、自国内にしか関心を持たないという癖は永遠に直りません。これを直すには、博士号を取って就職したら、その後もう一度再教育する、自国史をやっている人たちが隣の国にも関心を向けるように、もう一度教育し直す必要があるだろうと思います。私は私の友人、韓国のイム・ジヒョンという人がやっているトランスナショナル・ヒストリーをテーマに掲げる夏期学校に大変期待していたんですけども、彼は全部英語でやってしまうので東アジアの自国史をやっている人を結果的に排除することになっている。私はこれで大変失望しましたものですから、「仕方ない、自分でやるか」というふうに言っているのですが、お金にしても、組織にしても、大変な手間がかかるものですから、まだやれと言う声をかけてくれる人を見つけてはおりません。どうかスポンサー出てきてください(笑)。

最後に、和解という問題であります。これはもう歴史家だけではできない。それはまさにその通りですが、とくに政治家のリーダーシップがとても大事です。それからメディアも大事ですが、この点では日本のNHKなどはテレビの上で素晴らしい番組をいくつもつくっています。これをぜひとも教育現場で使ってほしいなあと思います。その上で、歴史家、歴史教育者は何をやるべきかということですが、これはやはり、まず政治

家をはじめとする実務家から不安を取り除くという必要があるだろうと思います。日本人は加害者の子孫なのでいつも何か咎められるのではないかと怯えているんですね。とても不安です。私もこの問題に関与し始めた十年ほど前は不安でした。不安だけれども、ちょっと見てもらえない、2001年の教科書問題で日本が沈みそうな感じがしたので、もう目をつぶって飛び込んだというのが現実です。やってみたらそんなに危なくなかった。ちゃんと外国のなかに友達も出来て、難しい話もできる信頼関係をつくっていったんですね。ということ、歴史家以外の人々にも体験してもらう。そのためにも、まず歴史家がそういう実践をやって、こういうふうによれば上手くいくし、こうやれば失敗しますよ、ここに落とし穴がありますよということを自分の経験から語るようにならなくてはいけないのだろうと思います。ということで、結局この東アジアの歴史認識問題の世界に戻らざるをえないということになったと告白して私のコメントを終わりたいと思います。